

わたしたちの「いま」、 わたしたちの「これから」

—— 追悼・三浦玲一 ——

越 智 博 美

河 野 真 太 郎

三浦玲一さんが亡くなって2年の月日が流れたが、いまだに三浦さんのことを語るのはとてもむずかしい。ご本人にとってはもちろんのこと、わたしたちにとっても辛い夏だった。三浦さんは、身に降りかかった病を受けとめ、すべてを注ぎ込んで最後の著作を仕上げた。その日々の壮絶さ、そして受けとめてなお、研究者としてのふつうの日々を過ごそうとしたこと、そしてわたしたちとのやりとりにおいても「あたりまえの、ふつうの日」を続けようとしたこと——そうしたあれこれについて、適切に語ることばを見つけることは、どうしてもできない。わたしたちは生き残ってしまったし、生き残ってしまった者として、まだ生きていかねばならない。けれども、そうした別れの辛さの一方で、研究といういとなみのなかでは、三浦さんと対話を続けているような感覚を持っている。

文学研究は、文学作品を分析することをつうじて、きわめてアクチュアルな問題にも向けられている。もちろん、そう言ったからといって、それは文学研究それ自体が政治的目標の道具であるということではない。たとえ一見してその論文が、ある特定の作品のみに特化した分析であっ

ても、またその作品が声高に政治を叫ぶものでなくても、文学の想像力のなかには広い意味で政治性があり、またそのような想像力を考えるその営為は、わたしたちのいまにも差し向けられているという意味で政治的だということだ。わたしたちの「いま」を考え続けること——たとえ1920年代の小説を論じることであっても、それが「いま」にどこかで接続されていること——が、三浦玲一さんの仕事だった。

「大学」という場合は、「学問の自由」に護られていながらも、しかし無風の間ではない。国立大学として国の予算に頼っている限り、政策や政治の風向きが変わればその風圧をまともに受けもする、そんなあやうい場、そして力関係はたらく場として考えるなら、大学は、さながらアリーナである。一橋大学という文学部がない学校で教養の語学を担当しながら、研究をすることは、つねにその力関係にさらされることでもある。ここにいる限り、「文学」を研究する意義を絶えず突きつけられ、ともすればそれは戦いの様相をすら呈することがあるからだ。なぜ文学を研究するのか、なぜ言葉を発するのか、発しないといけないと思うのか。誰に向けて語るのか。

三浦さんが一橋に着任してからの10年は、「語学」としての英語教育をめぐる環境が急速に変わっていく時でもあった。それは、教育現場が「グローバル化」という現象にどのように対応するかということでもあった。かつて大学における語学の授業は、「教養教育」の枠組のなかでなされていた。その多くが文学研究者や言語学者、英語学者、言い替えれば英語や英語圏文学を学問として研究する者でもある語学の教員による教養教育としての語学は、その言語を、その文化とともに学ぶものであるという考え方にもとづいて、英語教育の専門家スタッフとともに、読む、書く、聞く、話す4つの技能をバランス良く学ぶべきであるとする発想に基づいていた。しかし、そのような英語の授業、とりわけリーディングの授業はもはや不要であり、英語を母語とする人に会話を教わる「発信型コミュニケーション」授業だけが必要であるという方向への

圧力が強まっていった。グローバル人材、あるいはスーパーグローバルなど、「グローバル」という語がどこかにはいった補助金を競争的に獲得することが大学のあり方として要請され、一橋大学もまたその流れに否応なく巻き込まれてきた。それにとどめをさすかのように、2015年6月8日、文部科学大臣は、「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」という通知において、「特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする」とし、全国に動揺が走っているところである。「社会的要請」とはいったい何を指すのか、それが人文社会系とともに並べられるならば、その「社会」の要請とはほとんど「経済」の要請だと解釈できるだろう。しかも大学における教育の「成果」は、おそらくはしばしば「即戦力」と称される能力としてもまた、「要請」されていると考えて差し支えない。

三浦さんの研究は、この学校の環境のなかで変わっていった。英語教育が教養という名前よりはむしろスキルと名指されるこの事態は、もちろん真空で生じるわけではない。全体として、それはフォーディズムからポスト・フォーディズムへ、福祉国家から新自由主義国家へという流れのなかにあるものと理解できる動きである。詳しい議論はここではしないが、要するに国家から福祉によって助けられることはもはやないので、フレキシブルにコミュニケーション能力を発揮して競争社会で勝ち抜いていきたまえというのが社会の要請とも言えるのだ。だからこそ、臨機応変に喋り、発信する能力が、たとえばPISAテストというOECD（経済協力開発機構）による試験でもっばら測られるものであることを考えるならば、教育に経済的な尺度が持ち込まれていることは明らかである。

この後述べるように三浦さんは以上のような研究と教育の環境の抱え

る問題を、その文学・文化研究の中に取り込んでいった。しかし、はじめからそうだったわけではない。三浦さんの仕事は大きく分ければ二つの（もしくは三つ）フェーズに分かれていると見て差し支えないだろう。ただし、そこには断絶だけではなく重要な連続性がある。三浦さんはその研究を、アメリカのポストモダン文学研究から始めた。具体的にはアメリカのポストモダン文学を代表する作家ドナルド・バーセルミ（1931-1989）の研究である。その成果は最終的に名古屋大学に提出された博士論文『ポストモダン・バーセルミ——「小説」というものの魔法について』（彩流社、2005年）、そしてまたバーセルミの長編小説のひとつ『パラダイス』の翻訳（彩流社、1990年）であろう。ポストモダニズム、ポストモダン文学といえば、政治や社会、また歴史から距離を取り、そこから逃走する文学として悪名が高い。

晩年の三浦さんの仕事は、ポストモダン文学研究からは一見隔絶しているように見える。たとえば、一橋大学の英米文学系の教員たちが結集して、文字通りに新たな研究の宣言^{マニフェスト}をもくろんだ『文学研究のマニフェスト——ポスト理論・歴史主義の英米文学批評入門』は、三浦さんのイニシアティブによる企画であったが、そこでは三浦さんは「文学」の成立と社会的な想像力の排除」という章を執筆し、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』とマッカーシーの『ザ・ロード』を論じた。そこで三浦さんは、これらの作品が冷戦リベラリズム、そしてその冷戦リベラリズムを起源とするアメリカのリベラリズム一般のイデオロギー（みずからはイデオロギーではないというイデオロギー）が浸透したものとして論じた。

この論文と編著はさらには、晩年の三浦さんの問題意識の全体を背景としたものとみなせる。それは簡単に言えば、文学や文化的な作品を、グローバリゼーションと新自由主義の産物として、またそれらを文化面において生み出すものとして読解するという問題意識である。これを端的に表したのが、2010年2月16日に、三浦さんと本稿の共著者のうち

河野が共同で発表を行った語学研究室例会のタイトルと内容だっただろう。それはすなわち、「新自由主義の文化を研究しなければならない」という一種挑発的なタイトルである。この例会で三浦さんは、ハリウッドのディズスター映画をグローバリゼーションとそれに対応する新自由主義の「文化」として読み解くという発表をした。この発表内容はほぼすべて、死後出版となった『村上春樹とポストモダン・ジャパン』の一部に繰り込まれたと言っていいだろう。

『村上春樹とポストモダン・ジャパン』についてはぜひともご一読いただくとして、ここで強調しておきたいのは、この本が村上春樹などの文学、先述のディズスター映画、ティム・オブライエンやレイモンド・カーヴァー、フィッツジェラルド、フォークナーなどのアメリカ文学、さらにはカズオ・イシグロというイギリス現代文学を突き抜けて、さらには宮崎駿や奈良美智といった現代日本の文化を、先ほど述べたように「新自由主義の文化」として批判的に読み解いていることである。この死後出版の本は、文学と文化を政治的・歴史的に読み解くという晩年の三浦さんのプロジェクトの集大成である。（もうひとつの集大成は2013年にイリノイ大学シカゴ校に提出して博士号を取得した博士論文であり、それも世に問われることが期待されてやまない。）だが重要なのは、そのような集大成に再び「ポストモダン」の一語が入っていることだろう。先にポストモダニズムの非政治性・非歴史性について述べたが、結局のところ三浦さんにとってポストモダニズムとは常に歴史的概念、もしくは歴史化されるべき概念だったことが、ここに来て明らかになるのである。ポストモダニズムは、進行するグローバリゼーションと新自由主義の症状そして場合によってはそのような歴史的事実を隠蔽する文化であった。そしてさらには、1980年代以降の現象として説明されることの多い新自由主義そのものが、ポストモダニズムと同様に、より長い系譜（冷戦リベラリズム以降の、さらには戦間期モダニズム以降の系譜）を持っていた。このような歴史的パースペクティブの拡大は、いわば以前

の三浦さんの仕事をどんどん飲み込んで三浦さんの新たな仕事の土台になっていったと言えるだろう。

いったいそのような拡大がどこへ、どこまで三浦さん自身だけではなくわたしたちを連れて行っただろうかというのは、三浦さん亡き今では想像するしかない。しかし少なくともここでは、三浦さんの仕事のうちでも、未完の軸とも言うべきものを指摘しておく必要がある。わたしは三浦さんの仕事が、二つまたは三つのフェーズに分けられると述べた。その三つ目はフェーズというよりはもうひとつの関連するテーマなのであるが、それはセクシュアリティとジェンダーをめぐる、そしてさらにはフェミニズムをめぐる研究である。

これに関連して、2012年からお茶の水女子大学で継続的に開催されている Third-Wave Feminism 読書会を、三浦さんは中心となって組織し、精力的に報告を行っていた。それまでもクィア批評を中心としてジェンダー・セクシュアリティ研究を行っていた三浦さんであったが、この「第三波フェミニズム」への展開は、新たな展開であった。この主題に関する暫定的な決定版（という表現もおかしいが）の仕事は、一橋大学でのリレー講義を元にして三浦さん自身が編者のひとりとなって編さんされた『ジェンダーと「自由」——理論、リベラリズム、クィア』（彩流社、2013年）と、それに収録された「ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの可能性——『プリキュア』、『タイタニック』、AKB48」であろう。この論文では、新自由主義と骨がらみになったポストフェミニズム状況の乗り越えとしての第三波フェミニズムの重要性が力強く論じられている。ここでも、三浦さんの問題意識が、新自由主義的な現在の批判と乗り越えへと収斂し、ひとつの全体的な「思想」を形成する様を見て取れる。

しかしその「全体」はいまだ未完成であった。上記の論文における、三浦さんによる女の「連帯」への呼びかけは、未来への、未だ来たらざるものへの呼びかけだったのだ。

そうだとすれば、その呼びかけに応えるべきなのは、これから生まれてくる人たちだけではなく、三浦さんの死後に生き残ったわたしたちでもある。じじつわたしは、三浦さんが亡くなった後、研究上のアイデアを思いついたり、論文を書いたりするたびに、それについて三浦さんだったらどうコメントしたでしょうか、と考えるのを止められないでいる。そして何かを書いたときに、それが三浦さんの残した仕事にどのような上積みをできたでしょうかと自問するのを止められない。三浦さんはそのような「死後の生」を生きている。

そのような「死後の生」のあり方というのは、わたしたちの生の重要なあり方のひとつだろう。英語でのお悔やみの言葉に Rest in peace というのがある。その通り、三浦さんの魂が安らかにあることを心から祈りたい。でも、あえて、Do not rest in peace とも言いたい。三浦さんの残した、そしてやり残した仕事はまだ継続しているのだし、それはわたしたちだけでなく、またその先へと継承されていくのだから。